

# 英語科学習指導案 私の書き方

齋 藤 由 紀

英語の教員を目指す学生たちに「英語科教育法」や「教科教育法」などを通して、英語科学習指導案の作成について教えてきている。2022年4月より神戸女子大学文学部教育学科に着任してからは、2年次生には「中等英語科教育法」、3年次生用「英語カリキュラム論」といった科目において「英語科学習指導案」が書けるように指導をしてきた。

本稿では、筆者自身がどのように指導案を計画し、作成しているのかについて、紹介するものである。できるだけ具体的にわかりやすく書くように気をつける。

学習指導案について学生たちと討議や作業する中、どうしても指導案を作成できない学生たちがいることも事実であり、どのように指導すれば書けるようになるのか、という疑問が深く根差すようになった。そこで、本稿を執筆しようと思い立ったものである。

筆者は、英語教員として教壇に立ち四十年近い日々をおくってきた。振り出しは、1981年に京都市公立中学校で教育実習をさせていただいた時に遡る。それ以来、英語科学習指導案を書き続けてきている。

英語授業を行う際には、今では、実際に紙媒体に文字化するようなことまではなかなかしないが、ポイントをノートに書き留めるなどして指導案の代用にすることは実践している。少なくとも、授業前には、頭の中でその日の授業の目標、流れを立案し終わってから、教室のドアを開けているわけだ。

日本の英語授業を数年間受けていても英語を話すことも聞くことも出来ないという声を今でもよく耳にすることがある。その原因について探ることは別の稿に譲るとして、あくまでも英語教員を目指す人たちに本稿は手にしてもらえたらと願っている。

## 1. 概要ならびに各項目で実施すること

英語科学習指導案を書くときのポイントとして、筆者は以下の手順で考えている。

### (1) 目標を定める：何を教えるのか

文法事項と教科書で扱われている内容を踏まえているものになっているかを検討して決める。教科書の内容でいうと、各単元にはおおよそ一つの文法項目ならびにテーマがあるだろう。それらのことである。

### (2) 展開部分を書く：どうやって理解するのか、理解させるのか

どのような状況でターゲットとなる文法項目が使われるのかを想像し、状況への理解を深める。指導案の中でもっとも骨格となる部分であるため、アイデアをたくさん考える。

説明の場合は、明示的に説明することを心掛ける。

最近、ターゲットとなる文法項目を含む例文をたくさん準備して示し、それらの例文から法則（つまりこれが文法）を、学習者に「気づかせる」、「発見させる」ことを試行している。

（３）導入部分の作成：展開からの逆算

一連の帯活動あるいは、展開の部分を教えるにあたり前提として理解して置いて欲しいこと、前時の復習や今日の目標を達成するために必要な活動を設定していく。それとともに英語を学習する楽しい雰囲気づくりなどを行うことを心掛ける。

（４）まとめの活動：全体のながれを考え、補足すべきことを行う。

まとめで行う指示としては、次の授業へ向けて何を学習者にしておいてほしいかを考える。つまり、授業の補足になるが、その指示を考える時も、主に学習者のアウトプット活動を中心に考えている。具体的には、作成を指示することが多い。

（５）教材を作る：（１）（２）を実現し、生きた英語活動を行うために周到に準備する。

できるだけ生徒たちの視聴覚に訴えるように工夫する。絵やカードなどの準備は必須だ。その他に、目標文法を使うためのアクティビティやタスク活動を実施するのに必要な用紙などを作成していく。

（６）学習指導案、プランに沿ってやってみる：教員側と生徒側の両視点で確認

タイマーなどで時間を測定しながら、授業を実施する側（教員の立場）で指導案の計画を行ってみる。次に、生徒の立場で指導案に沿った授業を受けてみる。この生徒側での検証をすることで、作成した指導案の良い点と改善点をより明らかにすることが可能となる。

## ２．各段階で行うことや留意点

「英語カリキュラム論」では、教科書の目次の部分をみながら、受講生たちと教科書の構成について討議をしたが、教科書がいかによく考えられているかについて驚いた受講生が多かった。

教育現場、中学校や小学校５、６年生では英語用の教科書を採用しているだろう。教科書はどの教科であっても最も重要な存在であることを認識し、くれぐれも軽視することがないようにしてほしい。よく言われる言葉であるが、「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ということを心掛けている。

（１）何を教えるのか、目標は何か

授業で何を教えるのかをまず考える。目標である。英語の授業であるから、児童生徒たちには英語で無理な意思疎通できるような力をつけていくことが基本的な重要事項であることを忘れない。その上で、毎時間の目標を明確にし、学習者に提示していこう。

英語という言葉は日本語とまったく異なる言語である。ここが興味深く面白いのだ。文字が異なる、発音が異なる、語順が異なる、など。お天気一つでも表現は異なる、だから面白いし、まなぶ意味がある。

教科書を土台に置いたら、各課には一つの習得する文法事項がある。それを理解させて、使えるようになってもらうことがもっとも重要であり、それが目標であるだろう。ただし、文法というとまるで数学の公式のようなことだと思いこんでいる学生もいる。ここでいう文法とはそのような公式のこ

とを指しているのではなく、英語であろうと韓国語であろうと人間が使う言葉の体系であるのだから、それを伝えるのには、その言語なりの伝え方があるということを意味していることを忘れない。

中学校でアルファベットから指導してきた経験から、生徒がつまずく文法（項目、事項）というものがいくつかある。それらの内、三単現を例として次章以降では具体的な指導案の書き方について紹介していく。

目標は欲張らずに一つか二つに絞るのがいい。生徒の英語学習への意欲を引き出すためにわかりやすい言葉を使って授業の最初に示そう。

具体例)「現在完了形の継続用法をまなぶ」という表現は英語科学習指導案的にはいいかもしれないが、これをそのまま教室で「本時のめあて」として示すのはどうだろう。筆者なら「今朝からずっと～をしているんです」とか「いついつから〇〇をしています」と、ある状態が一定の期間、連続し続けていることをどう伝えるかが今日のめあてだというように児童・生徒目線のことばで提示することを心掛けている。

## (2) 展開部分

学習指導案では、おおまかに「導入」「展開」「まとめ」の流れで構築する。これら3つの中で最も重要となるのがこの「展開」とよばれる部分だろう。

前の部分で書いた「どのような状況でターゲットとなる文法項目が使われるのかを想像し、状況への理解を深める」というのは、(1) 目標でも書いた学習する文法事項（ターゲット）がどのような場面で実際には使用されるのかを、教室という場でうまく再現することと言えるだろう。

英語は生きた言葉なので、それを使って、情報のやり取りやコミュニケーションがとられている。だから、教える際には、ターゲットとなっている文法を使わなくてはならないようにしていく必要がある。そうでなければ、学習者は意味もわからず教員の言う英語を意味もなく繰り返すといったことが教室で起こってしまう。児童生徒が英語を話しているのも、一見すると英語を習っているように見えるが、意味も分からずに英語をリピートしたところで、ターゲットを理解したことにはならない。このことを教員はわかっておく必要がある。授業はあくまでも知的な活動、意味や情報のやりとりを展開する場であるべきだ。

そのためには、目標となる文法事項を「説明」という手法を筆者は若いころにやっていた。「説明」して、そのパターンを繰り返し口頭練習する、そして、教科書を読む、という流れがほとんどであった。後は宿題として練習問題に取り組ませる。よくこのような授業で、教員になりたての筆者の授業を受けていた頃の生徒たちが英語をある程度理解するところまで導けていたかどうかは、はなはだ疑問のあるところだ。

「説明すること」の問題点は、いくつかある。例えば、①うまく説明できない（つまり日本語ばかりが授業中に多用される状況につながる）、②教員は、説明するという行為をすることで、「教えた」気になるが、③生徒は理解しにくいという現実が生まれる。よって、説明しないで理解へ導く方法として次のような方法を考えついた。それが、例文をたくさん提示して、共通する規則、つまり英語の

文法法則を学習者（生徒）に発見させる方法だ。これならば、教員は例文をたくさん収集するだけでいい。それらの英文の提示や英語で伝えることが中心になるので、教室では英語が始終聞こえる空間が容易に出現できる。また、法則を、生徒が主体となって考え、発見し、体得することになる。他にもよい方法はあるだろう。それらを教員になる夢を持つ学生たちと探していきたい。

うまくターゲットとなる文法を理解させて、最終的には、児童生徒が実際に英語で自分の言いたいことや伝えたいことを言えるようにすることが重要である。そのために、教員は、まずそのターゲットがどのような状況、場面で使うことになるのかを考えていく、想像する力も必要だ。よって、展開部分を読めば、作成者の文法理解力がわかることになるといえるだろう。

通常「展開」で重視していることは、二つから三、四個の活動（アクティビティ）を取り入れることである。いわゆるタスク活動やコミュニケーション活動を行う。それらは難易度的には「易しい」ものからより「難しい」ものへと組み立てておく。足場かけという言葉を使いながら重要である。

### （３）導入部分の作成 展開からの逆算

展開部分を作成したら、「導入」を考える。学習指導案では、この「導入」部分が「展開」部分の前にあるので、「導入」から「展開」へという順に考えがちであるが、筆者はむしろ「展開」で行うことを先に作成してから「導入」部分を考えることにしている。その方が、授業全体の流れが良くなる上に、指導の一貫性が保たれるからだ。

繰り返しになるが、「展開」が根幹部分である。よって、「展開」に入る前に知っておいて欲しいことや復習にあたる部分をこの「導入」段階で行うようにしてきている。「展開」に入る前の段階なので、前提状況をよく考えて、この「導入」部分を作っていく方が、計画を立てやすい。

場合によっては、ウォームアップと連動させて「帯活動」を行ってもいいだろう。

英語の歌などを歌う、英語による Q&A を行うこともあるだろう。挨拶から「導入」へ入りながら楽しい英語授業の幕開きを試みる。

「導入」だからといって、軽くみることは慎みたい。いつも同じ活動に終始していないか。生徒の実態に合っているか。いつも復習ばかりになっているのではないだろうか。この部分を充実するためにも、普段から英語活動や授業に関する書籍を読み、動画を視聴するなどして備えておく。よく「教員にはいくつかの引き出しが必要だ」といわれる所以だろう。

### （４）全体のながれを考える

「導入」と「展開」部分が完成したので、授業全体のながれを考える。そこから「まとめ」で行う活動を考えていく。

「展開」部分で行った活動へのコメントや授業外で行っておいってもらいたいことがあるはずだ。つまり、ここで「授業の補足」を行う。いわゆる「宿題」の説明や次回の授業のために行っておいて欲しいことを伝えてもいい。ワークブックを採用している場合には、それについての指示もあるだろう。

「次の授業までに今日覚えた英語の文を何人かの人に聞いてもらっておきましょう」といった指示

や「今日学習した教科書〇頁の本文を何回読んだか、次に教えて」といったことでもよい。筆者は最近、主にアウトプット活動を中心に考えるようにしている。学習者自身のことについてターゲットとなった文法項目を使って発表してもらうことが、学習者にとって英語を身に付けていくためには有益であるからだ。

#### (5) 教材を作る

ここまでで、「導入」「展開」「まとめ」の部分が出来た。そこで、必要な教材を作成してゆく。

「展開」で行う活動がいくつかあるだろう。場合によっては、「導入」段階でも必要なものがあるだろう。それらを自分の作成した計画をみながら具体的に想像して、教材を作成する。非常に楽しい段階に来たともいえる。その時に留意しているのは以下のことになる。

できるだけ視聴覚に訴えるように工夫する。絵やカードなどを準備する。生徒たちにうけそうな絵を想定しながら行くと作業効率がアップするはずである。他にもアクティビティやタスク活動に沿った用紙などを作成する。

アクティビティやタスク活動では、実際にターゲットである文法項目を使えるようにするのが目的であるので、ペアやグループ活動をするためのものを作ることになる場合が多い。紙切れ一枚でいい。クラスメートにアンケートを取るようにして、そのターゲットとなる英文を何度も自然に使用させることが出来るようなものを工夫したい。

生徒たちのわくわく、あるいはどきどきする表情を思い浮かべながら作成していく。

#### (6) プランに沿ってやってみる

教材をいったん作り終わった後でも前でもいいが、作成した英語指導案に沿って授業をやってみる。できれば、教員側と生徒側の両視点で確認するのがよい。これをしないしていると、実際教室で行うと予定とおりに進まない、あるいは予定していたことをすべてやり終わってしまい困るというようなことが起こる。また、それぞれの段階でどのくらいの時間が必要かを知らずのために、必ずタイマーなどで時間を測定することも忘れないで行おう。

教員側の視点で授業案を行う場合は、予定していた時間で実際に行えるかどうかがわかる。「導入」「展開」「まとめ」がそれぞれうまく関わり合いながら、難易度的にも簡単なものから難しいものへと導いているかどうかといったことが分かるだろう。

生徒側の視点で行うことで、ずっとリスニングばかり、ライティングばかりしているといったことが分かる。学習者の視点で確認すれば、その授業内容が4技能のバランスが良いものになっているかどうか、変化がある程度あるものになっているかどうか、といったことが分かる。もし、可能ならば、指導案のところへ、4技能の頭文字でアルファベットチェック欄を設けて、該当部分に○などを書き込んでいくのもいいだろう。



### 3. 具体例

ここでは、いわゆる三単現と呼んでいる文法項目を取り上げて、1で述べたことに基づき、学習指導案を作成していく手順について紹介していく。三単現は、中学一年生の初期段階で扱う文法であるが、日本語母語話者にとっては、英語という言語との差異に気づき、驚かされる文法だと考えている。人称によって、動詞の活用形が対応する、「何、それ？」という学習者が多いのではないだろうか。少し英語を教える経験を積めば、学習者にとって最初に英語がわからなくなる分岐点だということに気が付くだろう。つまり、いかにこの文法項目を教えるかで、学習者に英語への興味を持たせることができるかが決まるといっていいだろう。ちなみに、学習初期において三単現なる言葉を提示する必要性はまったくない。むしろ、主語が自分とあなた以外で一人の時には、動詞に s をつけるという規則を発見して面白いと感じ、その規則性をどう呼べばいいかを生徒と考えたいものだ。

#### 三単現

##### (1) 目標

三単現とは一般動詞に s 場合によっては es を付けるという規則のことだ。三は、主語が三人称、単は単数のこと、現は現在時制ということで、その頭文字をとって三単現という。中学一年生のかなり最初に習うことになる文法、つまり基本的な規則、英語の「いろはのい」ということになる。しかし、これが日本語母語話者にとってはなかなか難解である。なぜなら母語である日本語を話すときに、人称・単数複数・現在か、といったことを意識することがないからだ。主語を意識することすら難しい。よって、主語に合わせて動詞を使いこなす、つまりすぐに口をついて英語を言えるようになるまでにはかなり時間がかかる。一歩進んで意識しないレベルで使いこなすことが出来るようになるのにもさらに時間がかかる。

日本語にはない概念を含みかつ基本的な規則であるため、規則を説明するよりもむしろ実践的に英文を口にすることや、たくさん聞かせることから始めるのが良い。そう、英語圏に生まれた赤ん坊が英語を耳にし、口にするようになることで規則を意識しないレベルで身に着けていくように、導くようにしたい。このことを教える側がどれくらい意識できるかで、生徒の理解度が左右される項目といえるだろう。

ここで、英語は主語というものが必ずあることと、主語と動詞に呼応する関係があることに気が付くことが出来れば、英語への興味を持つきっかけにもなる。「英語は面白い」と思わせたい。

主語は、一人称、二人称、三人称の世界に分かれる。自分が主語に入っていると一人称、自分と相手がいれば二人称、自分と話をしている相手以外の人のことを話題にする場合は、三人称だ。

単数はもちろん単一であることを表している。一人、一つは単数。二人、二つ以上は複数となる。この単数か複数かという捉え方も日本語とは異なる概念だ。ここも面白い点であるし、習得するにはある程度時間がかかるところでもある。日常で物（名詞）を見た時に、一つか二つ以上かを意識するようにしておくことが、英語習得にとって良い方法だと考えている。

現在というのは時制の概念である。過去形を学習するまでは、現在のことを扱いながら英語を学習

していくことになる。

中学一年生で、三単現を学習した時、とりあえず、主語というものに注目し、「一人あるいは二人以上か」と考える癖をつけておきたい。日本語にはない概念であればこそ、そこが面倒なようでもあり、きちんと対応関係が理解出来るようになるかで、英語を得意と思えるかどうかをかなり左右するだろう。テストなども実施して学習者の理解度、定着度を確認していきたい。

批判を恐れずに言わせてもらおうなら、三単現を理解できるかどうか、理解した上でどれだけ練習できるかで、その後の英語の学習に差が出るように思う。だから、先生はこの項目をどう教えるかで、生徒と英語がその後どのような関係性を持つのかに影響することを意識する必要がある。具体的な教え方については、以下の部分で紹介する。

## (2) 展開部分

すでに述べてきたように、三単現では主語が人称、単数か複数かによって、動詞との対応関係があることに気がつかせ、どのような規則があるのかをわかるのが最重要である。よって、人物や動作をしているような絵とともに英文を教員が言いながら自然にこの規則に気づかせることが望ましいと現在では考えている。展開部分では活動を中心に考えておこう。

三単現は、その場（教室）にいない人について説明することや紹介することが出来るようになる。だから、教室以外の人物に登場してもらって自然な言語活動が出来るように創出しよう。

「展開」で行う活動は、上でも述べるが2, 3準備するのがいい。

人物の絵や写真などを準備する。(→教材作成も参照)

最終的にはアウトプットとして、自分の好きな人物や興味関心のある人について紹介できるようになる活動を行うことを目標に行うと楽しく、盛り上がる。また、この単元から常日頃、学習した英語をつかって、授業以外で言いたいことや情報を伝えていくということを習慣づけるといい。

以下にくたくさんの友だち>という内容で展開部分を提示していく。アクティビティは 2つあるいは3つになっている。

## アクティビティの例

### <くたくさんの友だち>：アクティビティ 1

(1) 動作をしている絵を準備する。黒板に貼っておき、生徒にはいろいろ話をさせておく。

テニスをしている絵 「〇〇さんは、テニス部だったよね」

「テニスといえば、〇組の〇〇さんが一番うまい」といった声を拾っていく。

他、「絵を描いている」「図書館で本を読んでいる」など生徒の身近な日常を表す絵を使うといい。

(2) 生徒の言っている話を聞きながら、教員は英語でそれを言っていく。何度か繰り返す。教員が

らの繰り返して聞かせる英語が生徒に伝わっていく、この過程が重要だ。

例)  plays tennis very well.

I play tennis, too.

(3) どんな時に s (es) がつくのか、考えさせる。出てこない場合は、他の絵を見せて英語を話して聞かせていく。そして、生徒たちからの反応を待つ。

(4) 規則を生徒たちに考えさせて、発表させる。この時、自然に声が出るまで一定の時間待つことも大切だ。

### <たくさんの友だち>アクティビティ 2

(1) 人物の写真や絵、動作ができるような絵を準備しておき（教材作成）、動作をしている絵やイラストを、黒板などに張り出す。

(2) 主語が I の場合を練習する。（教員と全体で）

例) I play the online game. I read a book in the library. etc

(3) Activity 「聞こえたよ わかったよ 活動」

ペアになり、一人は、自分のことを英語で表現する。それを聞いたペアは、You に置き換えて口にする（きちんと自分の言っていることが相手に伝わっているかを確認する）。

(4) 一人の人物の絵を示す。

教員は Maki plays the online game. Maki reads a book. と黒板に示された絵について発話をする。（最初は左から右への流れで言う）

(5) 別の主語の絵（手順 1 で示した人物が描かれている絵や写真、雑誌からのコピーなどでもいい）を示して発話する。生徒が自然にリピートするなどしてくれるまで繰り返すといい。

主語の絵は単数と複数ものをランダムに示す。これによりまずは耳から三単現の s に「気づく」ことが重要である。生徒から「たまにプレイ（play）じゃなくて、プレイズ（plays）みたいなことを先生は言ってるね」などと言う声が出るのが大事である。

(6) 上のような指摘が生徒から発信された段階で、教員は、一人の場合と複数の場合の違いを強調するために両方の絵を示して、英文を言う。



生徒が「ああ、やっぱり先生は、プレイ (play) って言っているときとプレイズ (plays) って言っていることがある」と言う声が教室全体から聞こえてくるようになったら、全体で英文をリピートする活動に入る (言わない生徒には強制しない)。

- (7) 一人の絵では plays、一方たくさんの人たちが描かれている複数の絵では、play だということから規則を見つけさせる。

人間は理解できない説明を何度繰り返されても理解できない。しかし、自分で見つけたこと、規則は何があっても忘れることはない。

主語が I, You の場合も英文を口にさせてみる。主語が単数の場合には動詞に s がつくことを「気づかせ」規則性を「発見」させることが大事だ。

- (8) 生徒一人ひとりに自分のことでやっていることを考えさせる。簡単なメモに要点を書かせてもよい (一分間 “thinking time” などとして時間を取る)。

- (9) そのあと、何人かの生徒に発表してもらう。一人の発表を聞いた後、聞いている生徒を指名して「○○さんが plays ～。」といった文を発表してもらう。三単現の s を忘れていてもかまわないので、一五分程度の時間をとって行う。三単現の規則を自然な状態で生徒の間に浸透させていくことが活動の目的だから、誰かの発表を真剣に聞く、という態度の育成も英語の授業では重要だからだ。

### <朝から晩まで自分の一日を英語でいえるようになる>アクティビティ 3

- (1) 教科書などにある一日を表す絵などを使って行える。なければ、朝から普通行うような絵を準備して黒板などに表示しておこなう。

- (2) やり方は、<たくさんの友だち>と同じ手順でよい。

まずは自分の一日で五文程度いえるようにする。→ ペア活動 → 主語を単数、複数で言えるようにする活動 (規則に気づき、発見する) → 使えるようにする

#### [応用]

- ・ ペア活動では、相手の英文を聞いて You に置き代えて発話する。
- ・ 相手の英文を聞いて絵カードなどで指を指すことをしながら行う。(→黒板に提示するものを縮小コピーして生徒の人数分あるいは半分の数 (ペア活動のため) 準備しておく)。
- ・ 相手の英文を聞いて、自分も同じことをしていたら “Oh, me too.” “So do I.” など一言付け加えるともっと英語を知りたくなってくるだろう。
- ・ 頻度を表す語とともに表現していく。

- (3) 導入

動詞が中心になるので、生徒たちがそれまでの部分で未提示の動詞を動作や絵、写真などとともに教えるといいだろう。

頻度を表す語 always usually often sometimes などここで教えておくと会話がより豊かになっていく。

一日（朝起きてから夜寝るまで）の基本的な英語表現を学ぶ。

教科書によっては、朝起きてから就寝するまでの生徒たちが一般的に行うだろうという動作についての英語表現をまとめて掲載しているものもある。それらを活用しよう。

教科書は最初から最終頁までしっかりと目をとおしておき、それらが使えるような文法項目と対応させておくと、教材作成にかかる時間が少なくて済むので必ずしっかり読んでおきたい。併せて、自分が使っている教科書会社以外の教科書でもできれば入手しておくと、教材作成に役立たせることができる。例文を考えなくてもたくさん入手することができる。他にも長文問題作成の時に自分で考えなくて済むといった利点がたくさんある。

#### （４）まとめ

「三単現」の表現を存分に使う（話す、書く）ことを念頭にまとめの活動として出来ることを考えておこう。単元のどの部分でどのような活動を「まとめ」として行うのが良いのか、ここでも、難易度を徐々に高いものへとすることを意識して考えたい。以下はその一例である。

- ・自分のやっていることに注意をして、発表できる文を英語で作ってくる。
- ・自分の友だちのことを紹介する英文を考えてくる。
- ・自分がこれまでに知らなかった動作を表す語を辞書で調べてくる。
- ・自分が授業で作った英文をペア以外の人（ペットでもいい）に聞いてもらい、感想をきいてくる。
- ・今日やったことについて日記風に英語で書いてみる。
- ・人物紹介活動：自分の憧れの人物について紹介する。

#### （５）教材

教材はどのようなものを準備するといいいのだろうか。

三単現の場合は、以下のものが必要だ。

- ① 動作を表す絵やイラスト、写真
- ② 人物の絵、イラスト、写真
- ③ 黒板などに提示する用と生徒たちの活動用のハンドアウト
- ④ 人物紹介用作文用紙（下書き用、清書用）

#### （６）教員側と生徒側

出来上がった指導案をみながら、時間を測りつつまずは教員側の視点で、実際に教室などで声を出しながら、授業を行う。主な注意点は以下のようなものが考えられる。

①各段階での時間配分は適切だろうか。考えていたよりも時間がかかる、あるいは逆に、かからない活動はあるのだろうか。

②教材として必要なものはあるだろうか。

③「導入」から「展開」へ、「展開」から「まとめ」へという一連の流れに問題はないだろうか。

次に生徒側の視点で、指導案に沿った授業を受けてみる。挨拶をしてから、「導入」「展開」

「まとめ」「課外活動」として何をどのくらい行うことになるのかをチェックしていく。生徒側の視点で行いながら、4技能のバランスや作業および活動の繋がりなどをみていこう。

#### 4. 文法項目で特に留意したいこと

2022 年前期で担当した「中等英語科教育法Ⅰ」「英語カリキュラム論」では、最終課題として「英語科学習指導案」を作成してもらった。そのことを通して理解しておいてほしいことをここでは述べる。

目標とする文法項目については、受講生に委ねた。人気があったのは、「受動態」「現在完了」「関係代名詞」であった。これらの文法項目を扱う場合に留意したいことは何だろうか。

##### 受動態

受動態は主語にあたる部分は何らかの影響を受けたことを伝える文である。筆者的には主語にくるのは「もの」が多いと思う。そこで、準備したいのは、有名な絵画、小説、建築物などの写真。それらを使って“This picture is painted by Gogh.”といった文章をたくさん提示したい。くれぐれも能動態から受動態への書き換えだけに終始するような授業内容にしないで欲しい。現実生活の中（英語圏）で、能動態から受動態へ置き換えるような状況は出現しないし、いちいち能動態で文章を考えてそれを受動態にしてからしか英語をアウトプットできなくなるような指導は、「百害あって一利なし」である。

さらに、受動態を教えることとは、「be 動詞＋過去分詞」という形を教えることではないことを肝に銘じておいてほしい。

##### 現在完了形

筆者が中学生の時に習った英語の文法の中で、理解するのに最も時間がかかったものである。なぜ、理解に時間を要したのか考えるとき、いくつかのことが今なら言える。まずは、学習時に実際の使い方ではなくて、用法というラベルを張られてインプットされたこと。

「完了・結果」「継続」「経験」やたらに糸へんの漢字が出てくるのにうんざりした。

文法を教えることは、ある文章に〇〇用法というラベルを張る作業をすることではない。

「ある作業をしていて、ちょうど終わった」ことや「ずっとあるが続いている」、「今までに～をしたことがある」といった内容を伝えることが出来るようになることが重要である。

「今までに～をしたことがある」ならば、I have ever been to USJ twice. といったようなことが言

えるようになるわけで、極めて汎用性の高い表現である。生徒たち目線で言いたいこと、伝えたいことを具体化していきながら、たくさんの例文を提示して、口頭練習を協働学習でしながら口慣らしさせていきたいものだ。

## 関係代名詞

「関係代名詞ってどんな時に使いますか」と発問すると、「二文を一文にする方法」という答えが受講生たちから返ってきた。受講生たちの数人は、中学あるいは高等学校でそのような授業を受けてきたのだらうとわかる瞬間だ。

関係代名詞は基本的に、あるものや人を説明するためにあるものだ、という根本を押さえておきたい。現実世界で二文を一文にすることなど起こりえないではないか。遠くに見える人（物）が知っている人（物）で、その人（物）と自分の関係性を説明したりするときに使うためにある文法項目だということを理解してから教えることが重要である。二文を一文にすることなどの練習問題をする場合でも、どのように説明することが伝わるのか、を考えて指導にあたりたい。そういったことを通して、英語は名詞を説明する場合、後から説明を加えていくことが出来る言葉であることを、指導者側は学習者に気づかせていくことが求められると考えている。

田中他（2016）では、文法指導を行う際に特に気をつけなくてはならない事柄について非常にわかりやすくまとめられている。ここに引用して一部を紹介しておこう。

一般的に、文法を知っているとは、（中略）文法の形式・意味・機能の 3 つの側面を知っていることであると言われます。（中略）／文法の形式（form）とは、その文法を使った文がどのように形づくられるかを知っていることをさし、意味（meaning）とは、その文がどのような意味をもっているかを知っていることをさします。そして、使用・機能（use/function）とは、いつ・なぜ・どのような場面で、その文法が使われるのかを知っていることをさします。文法の形式・意味・使用場面の 3 つの側面を知っていてはじめて、その文法をコミュニケーションで正確かつ適切に使いこなせるようになります。（p.24、下線は筆者）

学生たちに模擬授業をしてもらおうと、取り上げる文法項目の形と意味にばかり焦点がいき、使用・機能への視点が欠けていることがよくある。現在完了形といえば、「have (has) + 動詞の過去分詞」だということを教えるだけではなくて、どのような場面でこの表現を使い、何を伝えることが出来るのか、ということが重要であり、活用場面をイメージして授業を構築してもらいたい。田中他（上掲）でも「教師が文法の形式のみを眺めていたのでは、その文法の本質的な特徴を捉えることは難しく、生徒に興味関心をもたせるような文法指導の工夫はできません。（p.25）」と指摘されている。

文法の使用・機能について考えることについては、ここで取り上げた田中他（上掲）の第二章が非常に参考になるので、そちらを参照してもらおうこととしたい。

## 5. まとめ

人はたいいてい自分が教えてもらったように、教えるのではないだろうか。

神戸女子大学で出会った学生たちにどのような英語授業を受けてきたのか、尋ねてみた。すると、英語によるやりとり、コミュニケーション活動はほとんどしないで、読んで日本語訳をする授業、所謂文法訳読式での授業を受けてきた学生が相当数にのぼることを知った。こういった音声の存在や意味のある言語活動を知ることがなかった学生が教壇に立つことを考えるとき、どうしても気をつけて指導しておかなくてはならないことがあることをここに書き留めておこうと考えた。

気をつけておきたいこととは、英語を習得するには音の存在が重要であること、発音や発話の練習が欠かせないこと、十分な言語活動なしで英文を訳する活動をしていても理解促進にはなかなか結び付かないこと、文法理解には問題を解くことやドリルだけでは不十分であること、教えることには順序だてることや具体化が必要であること。さらには、教員もともにまなび成長する存在であることも忘れてはならないだろう。自分の授業はこれでいい、と思った時、ある意味成長が止まり、転落が始まる。謙虚に常に点検と反省を加え、新たな工夫やメソッドを編み出していきたいものである。

学生たちのほとんどが口をそろえて言うことがある。「授業は楽しい方がいい」と。確かに学習には楽しさが伴えば、いいだろう。しかし、楽しくてためになる英語授業の創出は基本的な事柄を大事にすることから始まるのではないだろうか。

筆者も、残された教員生活の時間を学生たちとともによりよい授業の創出へ向けて工夫と試行錯誤を重ねていきたい。挑戦は続く。

## 引用参考文献リスト

- 伊藤豊美 2012 『英語教師を目指す学生のための実践・英語科指導法演習 教育実習から採用まで』  
大阪教育図書株式会社
- 金谷憲・粕谷恭子・物井尚子 2021 『[動画でわかる] 英語授業ハンドブック<小学校編>』大修館書店
- 金谷憲・青野保・太田洋・馬場哲夫・柳瀬陽介 2014 『[大修館] 英語授業ハンドブック <中学校編> DVD 付』2009 年第 1 刷 (2014 年第 5 刷) 大修館書店
- 酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一 2021 『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ 小学校外国語内容論』2017 年第 1 刷 (2021 年第 6 刷) 三省堂
- 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘 2021 『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教法』2018 年初版 (2021 年第三刷) 大修館書店
- 田中武夫・田中知聡 2016 『英語教師のための文法指導デザイン』2014 初版 (2016 年第二刷) 大修館書店
- 樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子 2013 『小学校英語教育法入門』研究社
- 望月正道・相澤一美・笠原究・林幸伸 2016 『英語で教える英語の授業 ―その進め方・考え方』大修館書店

望月昭彦 2018『新学習指導法にもとづく英語科教育法 第3版』2001年初版（2018年第三版）大修館書店

米山朝二・杉山敏・多田茂 2014『[新版] 英語科教育実習ハンドブック』大修館書店 2013年初版（2014年第二刷）

若林俊輔編 2018『英語の素朴な疑問に答える 36章』研究社